フィールドで考える

住居をよむ
――中国新疆ウイグル族の暮らしの場

熊谷瑞恵
民博 外来研究員

柔軟な空間

ウイグル族は、中国の少数民族のひとつである。イスラームを信仰するトルコ系民族で、居住地を、おもに中国最西端の新疆ウイグル自治区としている。この地は、中国でありながら、周囲をパキスタン、アフガニスタン、カザフスタン、ロシアにかこまれた、漢文化とは異なった文化のはじまる地である。

ウイグル族の住居にみられる特徴のひとつは、その部屋のなかに、ほとんどものがないことだ。絨毯の敷いてある居室、その一隅に、つみあげられた座布団。それだけなのだ。サンドゥクとよばれる衣装箱をのぞけば、家具はほとんどみられない。私物もない。このような部屋が、ひとつの住居にひとつというのならまだわかる。しかし、平均で六〜七つある部屋のほとんどがこうなのである。それが夫婦の部屋なのか、子どもの部屋なのかといった使いわけの痕跡も、そこには見出すことはできない。パソコンを置いた机のある部屋をみつけたとき、わたしは、きっとここは〝仕事部屋〟か〝勉強部屋〟なのだと思ったりしていたのだが、〝ここは今子どもが飛び跳ねて遊ばない場所だから〟とそこでの麺をのばす作業が始められたりしていた。ここは〝台所〟だったのか？

このような住居の調査として、まずわたしがこころみたのは、部屋の名前を聞くことだった。これまで人類学の住居研究では、住居には、客間、居間、そして寝室といった、公的から私的にいたる空間の区分がみられることが指摘されてきた。この区分という点からみた場合、ウイグル族の住居はどのような空間であるといえるのか。聞きとりをした結果、わかったのは、ウイグル族の住居の部屋には、名前が「ない」か「すべて客間だ」ということだった。

公私をわけない

こうした部屋での暮らしかたをみていくと、人びとが個人的な時間をすごしたり、目的ごとに部屋を使いわけるということがほとんどみられないことがわかった。人びとは、いつもひとつの部屋に全員が集まるというかたちでその空間をすごしていた。そこでは勉強も、雑談も、料理も、昼寝も、もてなしも、同じひとつの部屋でなされていたのである。そうした部屋は、その季節でいちばんすごしやすい気温の部屋であることが多く、その位置は、砂嵐やストーブの火の有無等によってもすぐに変更されていた。誰も、誰かの侵入をこばむ私的な空間をもたず、人びと自身も誰かとともにいることをさけようとはしていなかった。就寝時に男女をわけるということはみられたが、それ以外で目立った区分がおこなわれることはなかった。この人同士の妙な〝近さ〟、これがわたしをこの地に惹きつけてきた理由でもあった。

絨毯を広げると居室が誕生する。これからここでどのようなつきあいが生まれていくのか

私的な空間をわけることは、座位のとられかたといった点からもみることができる。それは例えば日本での、住居の奥を背にした主人の座位「横座」と、入口を背にした「客座」である。だがウイグル族の住居では、この座位も異なっていた。そこでは、客は奥を背にして座り、居住者は入口付近に座っていた。これは、大人数をむかえた際には、居住者は入口前にしゃがんでいるというかたちにさえなっていた。これでは住居が客のために建てられた空間であるかのようである。住居が、私的な空間の確保を目的としていないのだとすれば、それはどのような空間でありうるのだろう。

迎えられる女性客。友人のメッカからの帰国を祝う宴席にて

「女性」のつきあいの場

この住居のもつ秩序のありかを示してくれたのは、ここを出入りする人びとのありかただった。ウイグル族の住居には日々予告なく客がおとずれていた。こうした、なかば歓待を強制する客には、複数の家々のあいだで、共通している点がひとつあった。それが、客のほとんどが女性だという点である。冠婚葬祭のあいさつから、遊びにきたという客にいたるまで、住居には日々女性の客がおとずれていた。このような女性の客には、男性はあまり接すべきではないとされていた。そのため、こうした女性の客はすべて妻にとっての客であったといえる。興味深かったのは、夫方の男性の友人といった関係であっても、あいさつとなるとやってくるのは女性であったことである。ウイグル族のあいだでは、手土産をたずさえたあいさつ行為は女性だけがおこなえるものとされていた。そのため、夫同士のつきあいも、あいさつにおいては妻同士の関係によってなりたっていたのである。

壁沿いに、きしめんのような長い座布団を敷き、食卓となる布を広げた、女性たちをもてなす宴席の場（友人のメッカからの帰国を祝う宴席）

こうして、妻はつきあいに欠かせぬ人物として住居におり、外へと出かけるのはもっぱら男性だった。男性はまた、礼拝が、男性のみ大人数でおこなうことが推奨されているということを理由の皮きりに、終日外出をくりかえす。住居では、妻は女性客をもてなす主人であり、夫はそのもてなしのための買い物にでる。こうした場合、住居とは、私的な空間ではなく、「女性」「男性」とでわけられた「女性」のつきあいの場と考えられたのである。

新疆にいたころ、わたしは、ひとりですごしているときに目の前にたくさんの女性たちが入りこんでくることへ「いらだち」をおぼえたりしていた。そして〝こんなことを感じているようでは、彼らのつきあいはこなせない〟と嘆息したりしていた。それは、わたしの彼らに対する興味が、わたしとは何かという問いでもあったことに気づくときであった。